



太陽は昇る一方で銀の硬貨の上に輝いていた。  
そしてそれは長い時間の深い眠りの後 徐に目を開  
け痺れた体を伸ばした。その上ではたいへん湿気があ  
った！村のはずれの二階建ての農家の屋根瓦の上。

「おはよう」、優しく片側に言った。

返答なし。

「おはよう！  
起きて、夜が明けた…」もう一度言った、もっと優  
しく。

けれどその片側は答えなかった。今日も答えなかつ  
た。  
記憶する限り答えたことはなかった。どれだけ優しく  
話しかけたとしても、何度も求めたとしても。

空に昇る太陽を見つめて微笑んだ。

「どうして私に話してくれないの？」また片側に言  
った。

「私に話して、私もあなたと同じぐらいこんなにも  
独りなの。」

「私に話して。」

「知ってる、私に付き合うのが嫌かも知れない、だ  
けど何が出来るって？私たちは一枚の硬貨の二つの面  
に過ぎない。そして時々お話しするのもいいことよ。

お互いそれぞれがいるのもいいことじゃなくて？」

しかしもう一面は話さなかった。幾たびも彼女に乞  
いた。知っている限りの方法で彼女に乞いた。しかし  
そんなに多くは知らなかった！一枚の小さな安い硬貨  
の一つの側だった。それ以上のものではなかった。

「おやすみなさい」闇が降りる中、そう言った…

\* \*

「おはよう」太陽が微笑むや甘く言った。

返答なし。けれど多分まだ眠っているのだ！もう少し  
待とう。

太陽が高く昇るまで待った。金色の一つの太陽。あ  
の農家の瓦屋根の上、銀色の硬貨の上に輝く一つの太  
陽。その時思い切ってまた話しかけようとした。

「今日もいい一日ね、そうじゃなくて？」

しかし答えなかった。今日まで答えたことがなかったように。

何故？

もう片面の興味を引かなかった？

ひょっとすると話さない理由があったのかも？ひょっとすると誰かがもう一面のことを知るのよくなかった？

彼女にはそんなに悪くは思えなかった…

その一方で実際に何を知り得たのか？一枚の小さな安い硬貨の一つの側だった。

…

ひょっとして…

けれどそうだ！今まで何故考え付かなかったのだろう？それだ！それ以外にありえなかった。それ、そんなに簡単！

「ひょっとして話せないの？」彼女に言った。

「ひょっとして話したいけれどできないの？」

「それなら何かして、瓦を叩いてくれれば判る。」

「もし話せないなら、瓦を叩いて！」

何も起きなかった。

動きも、音も。それでも一瞬信じた…

ほんの一瞬だけやっともう片側と話し合えると信じた。草の生えた瓦を叩くことで多分。

微かな動きで意見や、考えや、感情を交換しただろう。話すための新しい方法を見つけたでしょう。

話すために！

村のはずれの一軒の屋根に、一枚の硬貨の二つの面。二つの面、ふたりきり。

何も起きなかった。

動きも。音も。答えは単純だった。彼女に話しかけたくなかった。

「よい夜を」そう言って、西に向かう太陽を見つめるために留まった。どうしようもなく泣きたかったがそうしまいとした。恐らくもう片方の側に気付かれただろう。

恐らく微妙な動きで、漏らすすすり泣きで気付かれただろう。

いいえ、泣くことはできなかった！恐らくもう片方の側に気付かれただろう。そして何が何でも悲しませたくなかった。

彼女もまた孤独な一つの側、ひとりぼっち。恐らく彼女よりもずっと独り。

けれどそれならどうして彼女に話そうとしない？何故？

小さな村のはずれにある屋根の上、二人とも、孤独な二つの面、ふたりきりなのに。

\* \*

その朝はおはようを言わなかった。

夜通し引っ掛かっていたある問いから始めた。それは世界の村という村のどの硬貨、どの面も、これほど彼女を苛みはしないものだった。

「ひょっとしてと私を憎んでる」と言って、震えを、目尻の涙をどうにかこらえた。

「ひょっとして私を憎んでる だって村と太陽は見えるもの？」「ひょっとして私を憎んでる だってあなたは瓦の方を向いているから？」

「言って！言って、お願い…」

返答なし。

「だけど私のせいではない、知っているでしょう… 覚えてるでしょう、そうじゃなくて？」

「あのいたずら小僧のせい、私たちをこの屋根に放った！」

「言って。覚えてるって言って…」

「…話して、お願い。私も一枚の小さな安い硬貨の一つの側なの。話して！あなたのことを話して！なんでもいいから言って！私はあなたのもう片面！」

それから絶望して自分の姿を描写し始めた。多分ありきたりの外観だった。細かな特徴の一人の女性の肖像、美しい鼻と好感の持てる目。何処かの二階建ての農家の屋根に永遠に囚われた一人の女性。

「あなたのことを言って」、そう言った。  
「何に似ているのか言って！」

「友達になれるわ！あなたが望めば親友になれる！全ての硬貨の、全ての面から一番の親友。あらゆる村で一番の親友。全ての国の。もしひとことでも言ってくれれば、世界一の。たった一言！ そうしたいって言ってくれれば！」

「そして私もあなたのためだけに存在する！そうしたら二度と話してくれなくてもいい…」

沈黙。全くの沈黙… けれど何故？  
彼女も孤独な一面、ひとりぼっち、恐らく世界中のども面よりも孤独…

…

あの日からそれ以降、見るもの全てを彼女に描写し

始めた。

彼女に話すことは求めなかった。もうそれ以上は。ただこれ以上求めることなく彼女に話していた。

村やその隣の森について話していた。家々の真ん中を通る大きな通りや市場について話していた。太陽と雲について話していた。空の鳥について。日曜ごとに鳴った鐘々について。

あの日以来その面の生活は以前と同じではなかった。見るもの全てを描写して、二度と何も求めなかった。

もう片面について知る事を求めないのが果たして良いことなのか悪いことなのか判らなかつた。しかし彼女の生活はあの日からずっと美しくなつた。そして孤独さは減り、村のどの場所のどの片面よりも、ずっと少なく感じられた。

孤独感の減つた一面だつた。

\* \*

あの屋根の上で初めて、嵐に見舞われた。冬の最初の嵐。

そして大きな粒が彼女に降りかかるとたいそう喜んだ。大切な片面を守つていたのだ！

風はとても強まつた。

瓦が震え始めるほどに強まつた。二階建ての農家の屋根の瓦はこれまでにないほど震えていた。

そしてその時災いが起きた！

世界のどの片隅のどの一面でも何が起きたか判らなかつたほど、素早く…

草の生えた屋根を転がるのだけを感じられた。

\* \*

下ではとても、でもとてもじめじめしてつた！  
村のはずれにある一つの小さな農家の庭の真ん中、  
下では。

それでも一面はいつそう嬉しかった！けれど泥に漬かつた一面だつた。泥に漬かつた、細かな特徴の一人の女性を持つ面。

それでもとても嬉しかった！

もう片面はまた雲を見ることが出来た。車や道を。鐘々や森を。  
もう片面を、太陽が照らした！

そう、とても嬉しかった。村中のどんな硬貨のどんな面よりもずっと嬉しかった。

そしてもう一面は間違いなく彼女に話すだろう。それまでは彼女に話すことのなかったもう一面。

間違いなく今から彼女に全てを物語るだろう。見るもの全てを。

山々や森。村や家々。太陽と雲…

彼女自身が聞くことは出来なくとも。彼女自身が話しかけることが出来なくとも。今や泥に漬かった一面であったとしても。

それでも少しだけふたりぼっちでなくなった二つの面だった。農家のある小さな村で、他のどの面よりも少しだけふたりぼっちでなくなった。

そしてその時災いが起きた！

世界のどの場所にあるどの面も何が起きたのかわからぬほど素早く。

しかし残念ながら彼女は間に合った… 残念ながら全てを知るのに間に合ってしまった…

\* \*

…湿気はもはや全く無かった。

ある収集家の所蔵品の目立つ位置の、曇り一つなく綺麗な一面だった。そして、しかし本当に、所蔵品の中でも特殊な、不思議な一つだった。

珍しく希少価値な一枚の硬貨だった。

事実類のない一つの硬貨だった！

今までどんな収集家も見つけたことのない一枚の硬貨だった！

沢山の所蔵品の真ん中のガラスの箱にあったあの一枚の硬貨——どうやってとか何故とか訊かないで欲しい——片面だけの一枚の硬貨！

そうです、お聞きになった通りです！

片面だけの一枚の硬貨。

…ずっとひとりぼっちな一面、  
他のどんな面よりも、他のどの硬貨よりも、  
世界の他のどんな場所のものよりも。

12月17日から18日にかけて



確かに街で一番大きい書店だっただろう。  
大量の本が一つの場所に集められていた。それらは木製の台の上に広げられていた。果てしない棚に並んでいた。棚は天井に届いていた。  
並ぶ本棚、一つの後にはもう一つの。そして人々。大勢の人々。あらゆる年齢、あらゆる種類の人々がその書店にいた。街で一番大きい書店。

しかしそこには、順番で最後列の本棚の、全ての棚の一番高い場所には一冊の孤独な本しかなかった。  
書店の人々を気につけないほど孤独だった——あらゆる種類の人々からなるまとまりのない世界。無関心な書店の果てしない棚や本箱も気につけないほどに孤独だった。それほどにも冷たく無関心だった。

この本には自分の物語があった…

...

…ある朝ある印刷所の奇妙な機械の傍らで目が覚めた。他の沢山の同じ本と一緒に縛られて目覚めた。それと同じ本だったに違いない。しかし詳細を覚えていなかった。すぐにまた眠りに落ちてしまった。

その本は——覚えているよ——生まれた時疲れていた。

二度目に目を覚ましたのは一つの手がしっかりと自分を掴んでいたからだだった。よい目覚めだった。しかし長くは続かなかった。手が開き本はその場所に置かれた。恐らく書店主の手であったのだろう。

そして今日もいる場所だった。全く同じ場所。全ての本棚の最後のより、一番上の棚、何処か右…

...

長い間、本当に長い間、誰かが自分を見てくれるのを待っていた。誰かが自分を探しに来るのを。自分の方に向かってくるあの女性は自分のために来たのだと望みを抱いた。

自分を下ろし、自分を見て、自分を連れて行ってくれる、彼女の家へ、もっと小さめの、もっと綺麗な、美しく色とりどりの本で一杯なより友好的な本棚。

そのようにその本も家を得るのだ。それ、一冊の孤独な本。

そして残りの同じ本たちは一体何処へ行ったのか？他の棚へ？ひょっとすると台へ？

その隣には自分と同じような本はなかった。この小さくて美しい本、百科事典のような分厚い本の間に挟まれて、最上段の棚、街一番の——それで？——書店の、最後の本棚に。あるドラマ。

起きたに違いない、多分、何かの間違いが。

それでも日々は過ぎそれに触れる手はなかった——どれ？これ！世界のどの書店の、どの棚にある他のどの本よりも触れられることを必要としていた一つの本。そんなにも孤独な一冊の本。

日々は過ぎそれに触れる手はなかった。他のどの本もそれに話しかけはしなかった。それに対して——もう一つの不思議な運のゲーム——背を向けていた！どれ？

あの背の高くて野暮ったい、百科事典のように分厚い本たち！

さて、その高いところに、世界で最期の本棚の、一番上の棚に、かつてあらゆる者とあらゆる物を憎んだ一冊の本があった…

色とりどりの本が並ぶ全ての本箱を憎んだ。それらを買う人々を憎み、その本たち自体を憎んだ。会計の店員、売り場の店員を憎んだ。背の低い禿げた店長を、棚と黒い本棚を憎んだ。自分の周りの本と、天井と大きな白い蛍光灯を…



自分自身を憎んだ。その著者すら憎んだ。

どれ？これ！一冊の本がかつて唯一望んだのは、触れられること。ほんの単純な接触。一冊の本が勝つ唯一望んだのは、愛だった！

その高いところ、街の最期の書店の一番高い棚に、かつて世界を憎んだ一冊の本があった。

＊ ＊

日々はゆっくりと残酷に過ぎた。過ぎ行く時と憎しみによってその表紙は色を失いつつあり、ページは殆ど黄色くなっていた。

それで？いずれにせよもはや誰もそれを買わなかった。誰もそれには決して気付かなかった。不幸な一冊の本。何処かの書店の、何処かの本棚の、最上段の棚に孤独な一冊の本。 …に関する一冊の本。

何に関する？

決して学ぶことはなかった！決して知らなかった！未だかつて、しかし今の今迄、考えたことがなかった。何の本であるのか考えたことはなかった！

何の本か知らなかった！教えられなかったから …読むことを！

その本は読むことを知らぬ一冊の本だった！

一つの喜劇。

…

その時から疑問に思い始めた。何であり得たのだろうか？もしかすると何か本当に美しいもの？

まさか！人々は美しいものを買う。間違いなく失敗作の本であつたらう。

見るにも、開くにも、ページを繰るにも、家に持ち帰るにも、色とりどりの金綴じの本のある小さな美しい本棚にも値しない、ある本。

そら寒いつまらない本であつたらう！多分抜け毛の原因に関する何か研究だろう。

まさか！ちびで禿の店主がページを繰ただらうに！

何か退屈な数学の本？

けれど数学者はその種の本を見つける、探し当てるのである！

何であり得たのだろうか？そして本自身が何であるのか知らないのに、どうやって他の者達が持ち帰ることをそんなに長い間待っていたのか？そして誰に訊いて教えてもらう？誰？誰？誰？

一冊の孤独な本、最後列の本棚の最上段、右の方。一冊の本——街で一番大きい書店、恐らくその書店中

でたった一冊——読むことを知らなかった。

そのページに載せられた文字たち、美しい装飾文字、それらはその本に何も語らなかった。

全く何も。

文字たちは、ご存じの通り、それを読むことを知る者以外には決して話さない。

文字たちはそれほどに、しかしそれほどまでに気位が高いのだ！

\* \*

少なくともその書名を知っていればよかったのに。それだけ。その書名だけ！判ればよかった、せめて、抜け毛の原因についての退屈な本であると。一冊の本、せめて、数学者の収集家に向けた。何か一つ！

何も。一つのドラマ。一つも方法はなかった。助けられる者は誰もいなかった。一冊の孤独な本、ひとりぼっちの本、一軒の書店の片隅、一つの世界の片隅、一つの本の銀河で意味もなく。

文字の頂点にあって無意味な一冊の本。

またしても不幸な一冊の本だった。

もはや他の本も、台も、絶え間なく行き来する人々

も、店員も、天井も、大きな白い灯りも憎むことはなかった。誰も何も憎んではいなかった。

しかし依然として空しすぎる一冊の本だった。多分前よりももっと空しい。

街の何処かにある一つの本棚に囚われた、独りすぎる一冊の本。惑星の何処かにある一つの街で。それがどうした？

それにはもはや興味がなかった。一冊の小さな本の背表紙を通して見てきた人々のことすら。それがどうした？その隣にある本と同じようであることも出来た。その隣にあるのが百科事典のように大きくて野暮ったい本であっても。

何もかももはや意味がなかった。中身のない一冊の本だった！

多分実際に他の本たちと同じ文言が書かれていたかも。その棚に置かれたのは偶然ではなかったかも知れない。多分ここに置かれなければならなかったのかも。百科事典のような分厚い本と一緒に。

ここに！最上段の棚に！一番上の棚、右の方、最後の本棚の——それで？——街一番の書店の。

多分ここがその場所だったのだろう！

それがどうした？そんなにそんなに沢山そこにはなかったか？

＊ ＊

もしページが空白であったらとても美しかっただろう、そうではないか？

それならば中身のない本がどのようなであったかを実際に知っていただろう。世界の全ての図書館の、全ての書店の、全ての棚の上でたった一冊の中身のない本。

しかし中身のない本などない！中身のない本など何処にも見つからないだろう！世界中の全ての書店を探したところで！

何故？

何故生まれなければならなかった？何故？何故？

言ってくれる誰かがそこにいて欲しかった。その著者にそこにいて欲しかった。

…

果たしてそれを書いた者がいただろうか？

単なる一冊の欠陥本であったとしたら？あの機械で一つの誤りが産んだ一冊の本、あの日、記憶にある最初の日に？誤りは一つだけだったら？無意味な一冊の本？それならば？

それならばたった一つの誤りであっただろう！それがどうした？誤りはここにいること、一冊の本が世界の片隅にぼつんといることではないのか？

誤りではなかったのか？

そしてもし誰か案に基づいて書いた本であったとしたら？案に基づいてよく考えた？そう… 多分… そうかも。一番あり得る。

けれどももし気に入らなかったとしたら？もし一冊の本の中身が——信じ難いほど考察された——気に入らなかったとしたら？

もし著者には中身を気に入られた一冊の本でもその本自身からは気に入られていなかったら？その時は何？

その時は更に悪いことになる！誤りはない！永遠に自分は不運だ！著者に気に入られるために正しく書かれた一冊の本！何故？

何故自分に尋ねなかったのか？自分が全てを負うのか？自分。自分！自分、何処かのある書店で、永遠にある棚に隠れて！

自分そして自分ひとり！

…

一冊の叫ぶ本だった。

ひとりぼっちで喚く本、信じ難い程ひとり、どの客も、どの店主も、どの店員も、どの作家もいまだかつて想像し得なかった程、世界の端に至るまで。

泣き、涙を流す一冊の本！その紙のページを濡らす一冊の本。

何故ならこれ以上そのページには意味はなかったから…

＊ ＊

何故なら決して意味はなかったから。ページも、大きな文字の書名も…

だからその本は意味が全くなかった！何故なら中身のない一冊の本、自らを全てと零に閉ざす一冊の本。

宇宙の片隅に一人ぼっちの一冊の本だった。そして不条理にも自らに宇宙を封じ込めた。

その本は書名が必要なかった。  
どんな本も書名など必要がないように！

その本は著者が必要なかった。  
どんな本も著者など必要がないように！

その本は何も欲しなかった！店員も台も、本棚も棚も欲せず、価値も値段もなかった。

その本は——それぞれの本のように——書名が欲しいのなら自分でつけた！中身が欲しいのなら自分で書いた！

そしてそれは子供のための一冊の本だったろう。  
色と音楽の一冊の本…

…

人々は去り、そして背の低い禿げた店主は灯りを消して重い鉄の扉を施錠した。

しかしそこに、暗闇と沈黙に、沢山の本の間に孤独に、世界の最後の本棚の最後の棚の上に一冊の小さな本が途方に暮れ、ひとり他の本に向かって叫んでいた！

そしてそれらの書名を表紙から消すよう促していた。裏表紙から文章を消すように。そしてただお互いに触れ合うように。

一冊の正気を失った本、夜の湿気に濡れたような本が、震えながら他の本たちに叫んでいた。

震えながら叫んでいたが、誰にもそれが聞こえなかった…

…彼らは多分規律を乱すことを望まなかった！

しかし彼らには訊く者が誰もいなかった！

彼らは著者も店員も要らない世界の片隅にあるただの普通の本でしかなかった、購買者や持ち主すらも。

彼らには必要があつたが、誰も決して彼らに尋ねなかった。

世界の何処かの棚に囚われ、何処かの本棚に積み上げられた。

そして決して彼らに尋ねなかった。

しかし彼らが代償を払う——宇宙の片隅に寂い本た

ち…

…

そしてそれも誰も尋ねることのなかった一冊の本だった。世界のその片隅でひとり叫び、喚いていた。

一冊の滑稽な本！名前も中身もない一冊の本、他の本たちに叫び呼び寄せていた、涙がその空白のページを溶かす程に…

そしてそれがかつて他の本たちを愛した一冊の本だった。

そして奇妙なことに、どのように世界の片隅の一つの本棚のそんな小さな棚の、そんな小さな一冊の本の中にも、収まることができた一つの…

そんな幸せ！

(12月16日から17日にかけての夜)